

開催地名	奈良県御所市
開催日時	令和8年2月8日(日) 14:00 ~ 15:30
開催場所	御所市防災交流館 Mimoro
語り部	草 貴子(宮城県仙台市)
参加者	自主防災団体 一般市民 28名
開催経緯	当市の防災交流館は令和6年4月に開館した。令和6年度にも防災イベントを実施したが、今後は防災交流館という施設を活かし、市民への防災啓発を毎年継続して行う必要があると考え、今回の講演会を開催した。開催にあたっては、各自治会の自主防災組織から「具体的な活動内容がわからない」「活動がマンネリ化している」「なかなか盛り上がらない」といった相談を受けていたことから、これらの課題解決に向けた知見を得ることを目的とした。
内容	<p>(1) 東日本大震災まで</p> <p>私は宮城県仙台市泉区で東日本大震災を経験した。東日本大震災で内陸部に位置していたことから津波被害はなかったが、ライフラインの寸断、道路の地割れ、多くの住宅被害が発生した。私が会長を務める市名坂東町内会は設立18年目、186世帯で、世帯主の多くは働き盛りや単身赴任であり、災害時に不在となる可能性が明らかであった。</p> <p>日頃から防災・減災力を身につけ、協力して乗り越えることを目的に、役員9名全員女性で町内会を設立し、2年目に集会所を建設した。ライフライン寸断に備えオール電化とし、障害者用を含めトイレ2ヶ所を整備し、鍋や使い捨て食器、インスタントコーヒー、卓上コンロ、黒いゴミ袋、子ども向けの絵本やおもちゃなどを備蓄している。</p> <p>(2) 震災時の状況</p> <p>3月11日14時46分、買い物中に地震が発生した。立ってられない揺れ、ガラスの割れる音、人の悲鳴、携帯電話の音、天井の落下がある中、階段を降りて外へ避難した。町内の方々が集会所の隣の公園に集まっていたため、集会所を避難所として開放したところ、女性と子どもを含め約100名が避難してきた。役員4名で備蓄米の準備を行い、毛布や布団を持ち込み、避難希望者全員を受け入れた。避難者の中からリーダーを決め、町内会役員がサポートする形で運営を行った。交流を図るため、毎日午前と午後にはコーヒータイムを設けたところ、「その時間があって安心できた」「その後も自然と会話が生まれた」との声があり好評であった。その後、電気は2、3日、水道は3、4日、ガスは約1か月で復旧し、避難所は3月20日で閉鎖した。</p>

避難生活の中では、家族と連絡が取れない人、沿岸部に家族や故郷を持つ人、持病を抱える人、ペットの体調を心配する人など、さまざまな不安を抱えている状況があった。また、ごみ集積所は壊れた家具や食器で山積みになったが、収集車の予定が分からないため、公園にロープを張り一時集積所とした。翌日から家電やタイヤなどの震災が原因ではないようなゴミも持ち込まれていた。区役所の方と仕分けや整理を行い、モラルを持つことの大切さを感じた。

3月20日に9日間開設していた避難所を閉鎖し、問題点や反省点を洗い出した。そんな中で、転勤族で知人の少ない地域で子育てしている母親、小さい子どもの母親たちへの支援の重要性を感じ、集会所を開放して子育て支援活動を開始した。多い年で年間1,500人、コロナ禍を経て現在は約500人が利用している。

(3) 自主防災への取り組み

行政に頼るのではなく、地域住民の意見を聞きながら活動するために市名坂小学校区避難所運営委員会を設立した。行政だけでは不足する物資もあるため、5つの町内会から毎年負担金をいただき、ゴミ箱、スリッパ、トイレトーパー、漏れパッド、筆記用具、折りたたみリヤカー、石油ストーブなどを購入している。組織構成は、総務、情報広報、食料物資、救護、衛生、そして女性の視点を生かすため、女性コーディネーターの6班体制で行っている。女性コーディネーターは主婦の知恵を生かし、避難所での困りごとの解決を担い、また尿漏れパッドを入れる布袋の作成、ペットボトルの蓋を開けやすくするオープナーの製作などを行っている。

避難所運営委員会では、住民参加型ではなく各班の知識と実践力を高めるリーダー研修形式の訓練を毎年実施している。昨年は6月14日に実施し、体育館入口の収納庫に設置している「初期対応手順書」に基づき、誰でも開設できる体制を整えている。感染症発生や急病人の発生などの事態を想定しておくことが大切である。仮設トイレについては、組み立ての困難さや便座の高さ、スペース不足などの課題を確認し、段ボールで再現して検証した。我慢せず綺麗にトイレを使用することが病気などの二次被害防止につながると考えている。また、視覚・聴覚障がい者協会の方に訓練に参加していただき、運営側と避難者双方の視点に立って訓練を実施した。ヘルプコーナーの設置や、運営委員の識別のためのビブスを着用、多言語での規則五か条の掲示などを行った。地域防災には住民一人一人の当事者意識が必要であると強く感じた。

(4) 最後に

誰も経験したことのない大震災の中で、それぞれが置かれた立場で、自分なりに懸命に役割を果たしてきた。それぞれにその人の役目があり、私もこれからの自分の役目は何だろうかと何度も悩んだ。多くの命が失われ、町の姿も暮らしも大きく変わってしまった現実の中で、人間の無力さや悲しみの深さを知ると同時に、人の優しさや支え合いの力も強く心に残っている。今を生きている私たちは、一瞬一瞬を大切にしながら歩んでいかなければならないと感じる。災害はいつ起こるか分からない。どのような状況であっても、自分や周囲を信じ、それぞれが自分の役目を果たすことが大切である。また、防災や減災を考えたとき、最後に行き着くのは健康な体であり、日頃の備えである。自分のために、そして大切な人を守るために、身体を大切にして活躍していくことが求められている。



開催地より

実際に被災地で避難所運営や被災者支援に携わった方の体験を直接伺うことができた。今回は多くの自治会関係者に参加いただいたため、この内容を各自治会や自主防災組織へしっかりと伝えていきたい。質疑応答からも、各自治会や自主防災組織が運営方法や活動の活性化について模索しながら取り組んでいる状況がうかがえた。行政としても、こうした団体への支援を行っていく必要があると認識した。

今後は、行政として自主防災組織及び各自治体の方々に対し、防災意識の向上に向けた啓発を推進していきたい。また、女性コーディネーターの重要性についての話もあり、防災において女性の視点が大切であることを改めて認識した。行政の担当部署に女性がいない現状も踏まえ、女性や要介護者、障害者、高齢者など、さまざまな視点をしっかりと活かしていきたい。